

# 母子相互作用の発達心理学的研究

研究協力者 小 嶋 謙四郎（早稲田大学）  
大 藪 泰（長野大学）  
田 口 良 雄（上田市立産院）  
百 名 盛 之（京都大学）  
繁 多 進（横浜国立大学）  
依 田 明（横浜国立大学）

## はじめに

本年度は、プレアタッチメント期の母子相互作用の成立に、重要な役割を演ずる クライミングと state との関係をひきつづき検討をおこない、また確立期の母子相互作用は、前年度にひきつづき、アタッチメントの発達をとりあげ、今回は家庭児と保育園児の比較をおこなっている。さらに、母子の分離、自立について、事例的研究を続行している。

なお、乳幼児保健指導と母子相互作用仮説については、前年度報告した新宿保健所幼児相談室の10年間の言語遅滞児224名のうち、精神発達質問紙を実施している111名（男児87名、女児24名）について精神発達のパターンと生育児との関係を吟味した。

ここでは、中間報告として、プレアタッチメント期、確立期の研究の要約を報告し、また言語発達児の集計結果を資料としてのせる。

## プレアタッチメント期の母子相互作用

大藪 泰, 田口良雄

### (研究 1)

昨年度に引き続き、満期産新生児を対象に、さらに例数を増やして早期新生児期の行動状態 (behavioral state) について検討した。ここでは特に啼泣と覚醒の連続性について報告する。

### 対 象 児

上田市産院で誕生した健康新生児。生後0日：15名（男児7名、女児8名）、2日：13名（男児6名、女児7名）、5日：13名（男児7名、女児6名）の計41名。平均出生体重、0日：3144g、2日：3202g、5日：3237g。

在胎週数、0日：40.0週、2日：40.0週、5日：39.8週。Ap. s. (1 min)：全員8以上。妊娠および分娩：異常なし。

## 手 続 き

昨年と同様である。行動状態は啼泣 (crying)、覚醒 (awake)、まどろみ (drowsy)、REM睡眠、Non-REM睡眠の5種類であり、2名の観察者の一致率はどの行動状態も80%以上であった。

## 結 果

図1に示したように、昨年度の結果と同様の結果が得られた。すなわち啼泣に先行および後続する行動状態は日齢の経過につれて睡眠の占める比率が減少し、覚醒が増加した（先行、後続ともに  $P < 0.001$ ）。「啼泣と覚醒は次第に連続性を増し、母子相互作用の形成により効果的な機能を発揮するようになる」との仮説を支持する結果が得られたといえる。

### (研究 2)

研究1と同様の手続きで、誕生直後の行動状態についての検討を試みたので報告する。

### 対 象 児

対象児1：自然分娩、男児、在胎週数37週2日、出生体重3005g、Ap. s. (1 min)9。  
対象児2：帝王切開（狭骨盤）、女児、在胎39週2日、出生体重2880g、Ap. s. (1 min)9。  
対象児3：帝王切開（児頭骨盤不適合）、男児、在胎42週0日、出生体重3750g、Ap. s.

(1 min) 9。

## 結 果

図2に示したように、いずれの対象児も産声(5~8分)に続いて、覚醒とまどろみ様の行動状態を呈する高覚醒期(high arousal)が70~80分持続し、その後睡眠に移行するというきわめて特異な行動状態が出現することが見出された。こうした事実について今後さらに対象児数を増やして検討していくことにしたい。

## 保育園児および家庭児のアタッチメントの発達に関する研究

横浜国立大学 繁多 進

### 目 的

近年、乳幼児をもつ母親が就労する機会は益々増加している。生後数ヶ月から保育園という環境で日中を過ごすことが、母子関係の発達になんらかの影響を及ぼすのかいなかという問題は、究明を急がなければならないきわめてプラクティカルな問題である。保育園児は①日中、母親と分離している、②複数の養育者をもつ(multiple mothering)、③集団で養育されている、という点で家庭児とは異なった環境で生活している。このような養育条件の差異が子どもの母親へのアタッチメントの発達にどのような影響を及ぼしているのかを検討するのが本研究の目的である。

### 方 法

我々は質問紙調査で保育園児と家庭児のアタッチメントの発達の差異についてすでに検討している(母子研究Ⅵ4)。その結果、0歳児のアタッチメント行動の開始時期は保育園児の方が約1ヶ月ほど遅れるが、満1歳までには差がなくなり、1歳児、2歳児の場合は、むしろ、接触、接近を求める行動は保育園児の方が強いが、母親を安全の基地としての探索活動は家庭児に比して少ない、という資料を得ている。

今回はM. Ainsworthらが標準化したStrange Situationとよばれる実験室的方法を用いて、両群間の差異を検討した。Strange Situationは8つのエピソードからなり、①実験者が母子をplay roomに案内し、母親が坐る

椅子と子どもをおろす位置を指示する(30秒)、②母と子の場面(以下3分)、③Stranger(若い女性)が入室、母、子、Strangerの場面、④母親退室、子とStrangerの場面、⑤母親入室、Stranger退室、母と子の場面、⑥母親退室、子どもひとり残される場面、⑦Stranger入室、子とStrangerの場面、⑧母親入室、Stranger退室、母と子の場面、という順序で進行する。

被験児は1歳児(誕生日前後一週間以内)、保育園児、家庭児ともに24名、2歳児は保育園児21名、家庭児23名で、横浜国立大学心理学教室のplay room内に9フィート四方のStrange Situationを作り、実験を行なった。

### 結果と考察

エインスワースはアタッチメントのパターンをこまかくは8つに分類しているが、大きく分けるとA群、B群、C群の3群に分類される。B群は正常群で、A群は母親との接近、接触を回避するAvoidant群、C群は母親との接近、接触を強く求めるが、反面、母親にresistanceやangerを示すambivalentで、いわゆるanxious attachment groupである。このようなパターン分類では、表1に見られるように、両群の間にまったく差異は見られない。しかし、具体的な行動においては両群の間かなりの差異が認められた。ここでは詳細を報告する余裕がないので、見出された顕著な差異を要約して示すことにする。

(1) 1歳児の差異、①見知らぬ場所に対する不安は家庭児の方が高い。保育園児は場所に対する不安が少なく、入室後すぐに探索活動に入る。②しかし、見知らぬ人に対しては保育園児の方がはるかに高い不安を示す。multiple motheringを経験している保育園児がStrangerに対してacceptableでないのは、Strangerを自分と母親を引き離すおそれのある存在として認知するのかもしれない。③母子分離場面では保育園児の方がはるかに高い不安を示す。④一度、母親と分離すると、母親と再会しても保育園児は不安が消失せず、母親との接触維持の欲求が高く、抱かれていても泣き続け、おろされることに強く反発する。毎日母子分離を経験している保育園児がStrange Situationでの分離にこれほど高

い不安を示すのは、分離経験が分離に対する抵抗力を強めるよりも、逆に、不安を高める作用をしているとも考えられる。

(2) 2歳児の差異, ①見知らぬ場所への不安は保育園児の方が低い。②Strangerに対しては家庭児の方がacceptableである。③母子分離に対する不安は保育園児の方が高い。④保育園児は母親との再会場面で接触維持欲求がきわめて高くなる。などの点は1歳児とまったく同様に2歳児にも顕著に見られた差異である。それらに加えて, ⑤保育園児は全体としてdistance interactionが家庭児に比して少ない, という傾向も2歳児には見られた。

以上の結果から, 保育園児はパターン分類では家庭児群との間に差異は見られないものの, 行動内容をこまかく分析していくと, 全般的に, 分離に対する不安が高く, 母親の不在が一時的なもので, 必ず帰ってくるのだという確信を得るにいたっていないという点で, やや不安を伴った母子関係を形成しているといえるであろう。

### 乳幼児保健指導と母子相互作用仮説

早稲田大学 小嶋謙一郎

#### 目的と経過

この研究は, 「乳児期の母子相互作用」が, 小児のパーソナリティの発達と健康の保持に果たす役割をあきらかにし, その成果を, 小児の発達遅滞や発達障害の予防, 早期発見, 早期指導の具体的方策に反映させることを目的としている。

55年度は, その第一段階として, 東京都新宿保健所, 川崎市中原保健所, 同市高津保健所管内の3才児健診来所児のうち, 「言葉のおくれ」を主訴として, 保健所内の幼児相談室に来室した事例について, 1. 年度別推移, 2. 来所児童に対する割合, 3. 相談期間, について, 集計整理をおこなった。

その結果, 45年4月から55年3月の10年間でみると, 新宿保健所では47年4月以降, また中原保健所, 高津保健所では, 49年4月以降, 「言葉のおくれ」の幼児の, 3才児健診来所数に占める割合が, 1%をこえること, また, 女兒に比較し 男児が多いこと, 相談受付後, 1年11月未満で, 85%以上が(新宿85.4%, 中原89.2

%), 好転し, 終結となっていること, がみとめられた。(図3-1, 図3-2)

また, 幼児相談来室者に対する割合の年次推移をみると, 3保健所ともに, 51年度に一時的に下降する現象が指摘された。なお, ちなみに51年度3才児は, 石油ショックがあった48年度に出産した子どもでもある。(図4-1, 4-2, 4-3)

今年度は, 前年度対象とした新宿保健所の幼児相談室の10年間の「言語おくれ」の総数, 224名(男児173名, 女児51名)のうち, 乳幼児精神発達質問紙(津守, 稲毛)を実施している111名(男87名, 女24名)について, これらの言葉おくれの子どもの, 精神発達のパターンと, 生育史との関係をとらえようと意図しておこなった。

#### 手 続

整理手続きは, つぎのとおりである。

1. 津守, 稲毛法は, ①運動, ②探索, 操作 ③社会, ④習慣, ⑤言語, の領域について, 問診法により発達評価をおこなう方式で, 結果は, 月令指標によるプロフィールによって表示される。

ここでは, 幼児相談初回あるいは, それに近い面接時に実施した質問法のプロフィールをもとに, 1. 運動, 2. 探索, 操作, 3. 社会, 4. 言語の各領域の月令指標を基準として, 5群に分類した。分類の基準と, グループ名と群別数は, 表2のとおりである。

2. 3才児健診時の母子管理カード, ならびに幼児相談室面接記録の記載事項から, ①出生順位, ②妊娠時の異常, ③分娩時の異常, ④新生児の異常, ⑤既往疾患, 外傷, ⑥始歩月齢, ⑦始語月齢, ⑧母の就労, ⑨父の職業, ⑩相談期間, の各項目を選び, 各群について分布をしらべた。(第3, 4参照)

#### 結 果

この研究では, 発達遅滞の基準を, 「津守, 稲毛法」にもとめ, 発達遅滞領域の拡がりの度合によって, I群, II群, III群, IV群, V群に分類し, 上記の各項目との関係をみた。その結果, 1. 妊娠時の異常( $p < 0.01$ )。2. 既往疾患の有無( $p < 0.05$ )。3. 母の就労( $p < 0.05$ )の各項目において, 分布に有意の差が認められた。

なお、第5表は、妊娠・周産期異常と既往疾患・外傷の内訳で、数字は実数である。重複がある

ので総数は111と一致しない。

表1 両群のアタッチメントパターン

		A群	B群	C群
一歳児	保育園(24人)	1(人)	19(人)	4(人)
	家庭(24人)	2	19	3
二歳児	保育園(21人)	2	19	0
	家庭(23人)	2	19	2

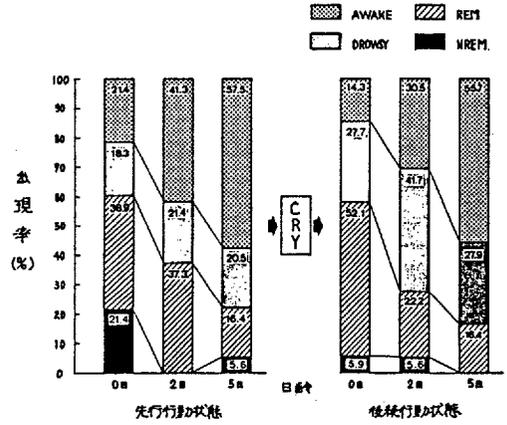


図1 CRYの先行・後続状態

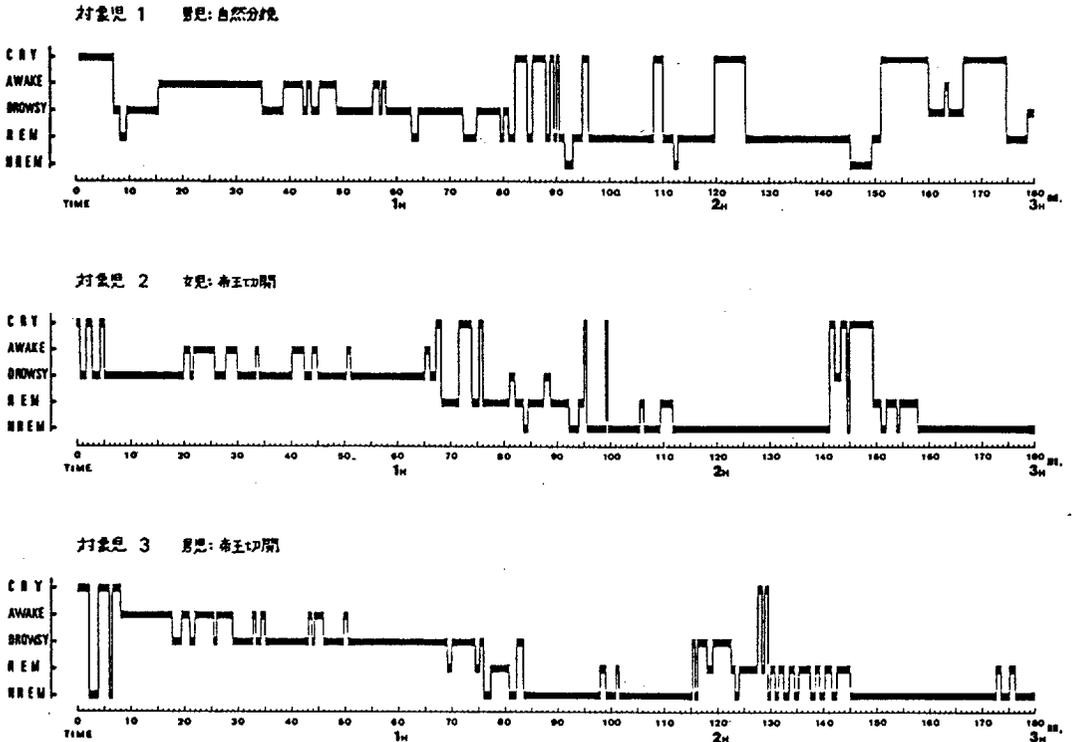


図2 誕生直後の行動状態

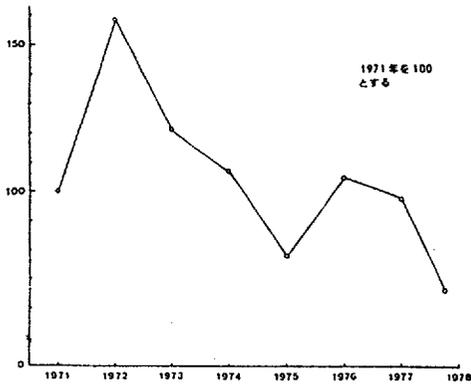


図3-1 相談件数の推移(新宿)

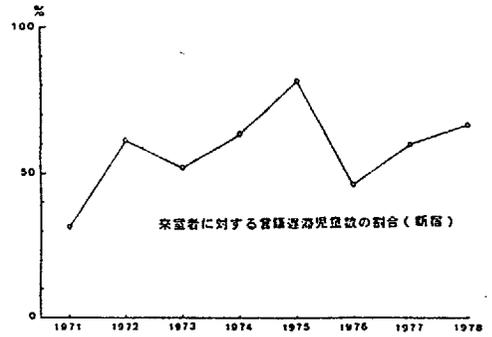


図4-1 来室者に対する言語遅滞児童数の割合(新宿)

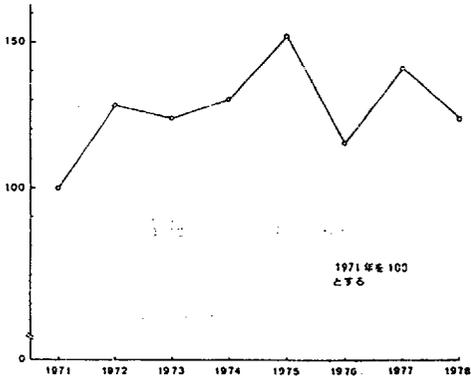


図3-2 相談件数の推移(中原)

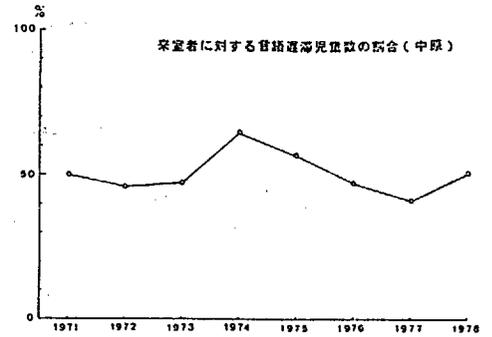


図4-2 来室者に対する言語遅滞児童数の割合(中原)

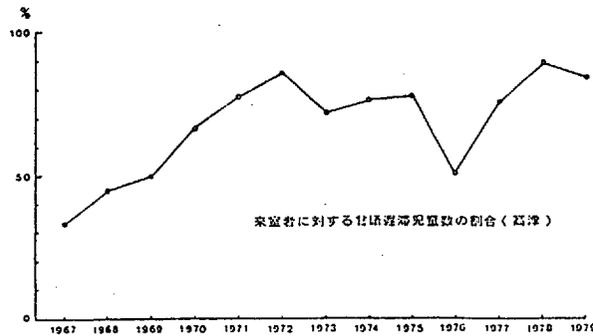


図4-5 来室者に対する言語遅滞児童数の割合（高津）

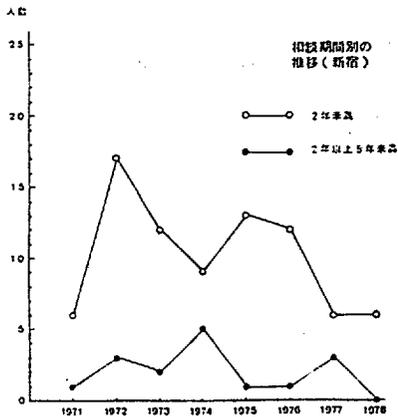


図4-3 相談期間別の推移（新宿）

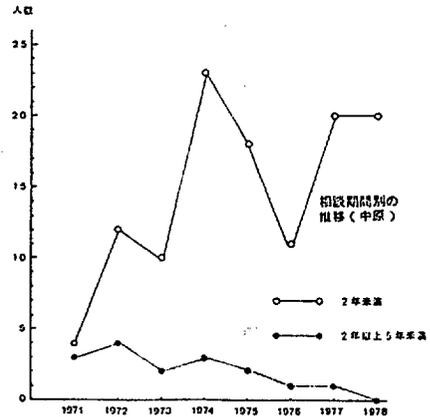


図4-4 相談期間別の推移（中原）

表2

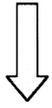
群名	基準	総数	男	女
I群	すべての領域におくれのないもの	11	8	3
II群	言語のみおくれのあるもの	30	25	5
III群	言語, 社会におくれのあるもの	36	29	7
IV群	言語, 社会, 探索におくれのあるもの	19	16	3
V群	すべての領域におくれのあるもの	15	9	6

表3

妊娠・周産期異常		I	II	III	IV	V	既往疾患・外傷		I	II	III	IV	V
妊娠時異常	妊娠中毒症	1	3	8	1	4	ひきつけ		5	2	4	2	
	つわり	1		2			麻疹・風疹・水痘・耳下腺炎	1	2	7		1	
	貧血	1			1		転倒・転落・頭部外傷		5	5	1		
	高熱			1			肺炎・気管支炎		2	1	1	3	
	子宮奇形			1			中耳炎	1	1	2	1	1	
	切迫流産					1	濕疹・アトピー性皮膚炎	1	1	3	1		
	狭骨盤					1	下痢・吐乳		2	1		2	
							陰囊水腫・停留睪丸		1	2		1	
分娩時異常	吸引分娩	2	1	4	5		先天性股関節脱臼		1	1		2	
	早期破水	2	2	2	1		火傷		1	1		2	
	帝王切開	2	2	2			喘息			3	1		
	微弱陣痛			1	1	2	脱水症	1	2				
	骨盤位	1	2				ヘルニア		1	1		1	
	出血多量		1				鼻炎・扁桃肥大・アデノイド			2		1	
	鉗子分娩		1				てんかん・脳波異常			1	1	1	
	ブーシ誘導			1			斜頸	1		1			
	子病前症			1			風邪をひきやすい		1			1	
	常位胎盤早期剝離				1		消化不良・自家中毒			1	1		
	羊水混濁					1	斜視			1		1	
	無痛分娩					1	骨折	1					
	双胎(1名死産)					1	扁桃腺炎		1				
						頭蓋癆		1					
新生児異常	仮死・チアノーゼ		2	6	4	4	頸幹前屈障害		1				
	低体重児・未熟児	1	1	3	2	1	高熱			1			
	新生児黄疸	2	3			1	項部硬直・そり返り			1			
	臍帯巻絡		1		2	2	貧血			1			
	早期産	1	1	1	1		胸腺肥大			1			
	過熟児		1				視力が弱い				1		
	新生児メレナ			1			外反足					1	
	頭血腫					1	眼瞼下垂						1

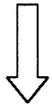
表4

群	1. 出生順位			群	2. 妊娠時の異常			群	3. 分娩時の異常			群	4. 新生児の異常			群	5. 既往疾患・外傷							
	第1子	第2子以上	計		なし	あり	計		なし	あり	計		なし	あり	計		なし	あり	計					
I	8	3	11	I	8	3	11	I	4	7	11	I	8	3	11	I	7	4	11					
II	16	14	30	II	27	3	30	II	20	10	30	II	21	9	30	II	11	19	30					
III	18	18	36	III	24	12	36	III	24	12	36	III	28	8	36	III	10	26	36					
IV	12	7	19	IV	17	2	19	IV	11	8	19	IV	13	6	19	IV	13	6	19					
V	8	7	15	V	13	2	15	V	7	8	15	V	12	3	15	V	4	11	15					
計	62	49	111	計	84	27	111	計	66	45	111	計	82	29	111	計	45	66	111					
群	6. 始歩月齢				群	7. 始語月齢				群	8. 母の就労				群	9. 父の職業				群	10. 相談期間			
	14ヶ月以前	15ヶ月以後	記載なし	計		20ヶ月以前	21ヶ月以後	記載なし	計		なし	あり	記載なし	計		自営業	非自営業	記載なし	計		1年未満	1年以上	中断	計
I	5	3	3	11	I	4	3	4	11	I	7	3	1	11	I	2	6	3	11	I	9	2	0	11
II	18	10	2	30	II	15	10	5	30	II	19	9	2	30	II	4	15	11	30	II	20	8	2	30
III	18	16	2	36	III	15	20	1	36	III	18	17	1	36	III	14	10	12	36	III	20	13	3	36
IV	9	10	0	19	IV	5	14	0	19	IV	17	1	1	19	IV	4	10	5	19	IV	7	10	2	19
V	3	11	1	15	V	9	6	0	15	V	9	3	3	15	V	2	5	8	15	V	10	4	1	15
計	53	50	8	111	計	48	53	10	111	計	70	33	8	111	計	26	46	39	111	計	66	37	8	111



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

本年度は、プレアタッチメント期の母子相互作用の成立に、重要な役割を演ずるクライニングとstateとの関係をひきつづき検討をおこない、また確立期の母子相互作用は、前年度にひきつづき、アタッチメントの発達をとりあげ、今回は家庭児と保育園児の比較をおこなっている。さらに、母子の分離自立について、事例的研究を続行している。

なお、乳幼児保健指導と母子相互作用仮説については、前年度報告した新宿保健所幼児相談室の10年間の言語遅滞児224名のうち、精神発達質問紙を実施している111名(男児87名、女児24名)について精神発達のパターンと生育児との関係を吟味した。

ここでは、中間報告として、プレアタッチメント期、確立期の研究の要約を報告し、また言語発達児の集計結果を資料としてのせる。